



ちょっとお茶にしませんか

第6話

鉄好人海外行

旅は道連れ…、 袖ふり合うも…

A merry companion is a wagon
in the way.

山本誠志

Masashi Yamamoto

日科情報株式会社 (元) 住友金属工業 (株)

私は、初めての都市では、自由時間があると、いや自由時間をつくって、一人で、一日あるいは半日コースの定期市内観光バスに乗ることにしています。その都市の概要を理解するのに最もよい方法だと思っています。

今回、一緒に廻るのは、国籍さまざま外国人ばかりで、一人もの、二人連れ、あるいは家族連れで、いわゆる団体様はいません。でも、ガイド嬢はいません。運転席をみると、ロマングレーの男がワイヤレスマイクをセットしています。運転しながらワイヤレスマイクで案内するようです。座席にはイヤホンがありました。窓際には、フランス語、ドイツ語、スペイン語等のチャンネルがついていました。さすが、国際都市の定期市内観光バスだと感心しました。さらに、ジャパニーズ (日本語) のチャンネルもあるのです。まさかと一瞬、目を疑いました。さっそくトライするも、何とも反応がありません。故障のようです。他の国でも故障しているのに出くわしたことがありました。なぜか日本語のチャンネルには故障が多いようです。どうしてでしょうか。運転手にその旨を伝えると、「日本人なら英語でOKでしょう」という返事が返ってきました。「Little bit. I can speak Janglish only」とかえすと、そのやりとりを聞いていた英語圏の人と思われる一人が「We can speak ○○English only.」と茶々をいれてくる始末です。そうこうするうちに、バスはスタート。さっきの○○英語人はなにやかや、運転手の助手よろしく世話してくれた次第です。文切り型のガイドより結構、楽しく市内観光を終えました。きっと運転手君も楽しかったでしょうね。

ある街の定期市内観光バスでは ある国の団体と一緒にされたことがありました。個人客は私を含め4人だけでした。4人は前方の席に座らされ、スタートしました。まもなく、

第一番目の見物場所で下車しました。所定の時間になって、バスに戻ると、私たち個人客が座っていた席に、団体様が座っているではありませんか。席を立つとき、確かに荷物を座席に置いておいたはずですが。そこに座っている人に、「ここに置いてあった荷物は？」と聞いたところ、黙って網棚を指さします。確かに4人の荷物は網棚の上にありました。「ここは私の席ですが…」と言ったところ「早い者順だ」言うではないか。やはり、お国によって習慣が違うのでしょうか。他の外国人の3人もすごすごと、自分の荷物をもって、後方の空いている席に移りました。次の見物場所に着きました。ここでは所定の時間よりかなり前に戻りました。すると、さっきの団体は既に席に着いていました。その後、数カ所で下車しましたが、ますます、バスに戻る時間が早くなっているように思えました。いつか、前方の席を取り返されるとでも思っているのでしょうか。こちらはとくにあきらめているのに。あるいは見物に退屈して早くバスに戻っているのかも知れませんが。このときだけは、私も敢えて訊くの差し控えました。

ある外国人の団体に、たった一人の個人客の私が詰め込まれたこともありました。旅行エージェントの手配ミスでそうなったのです。今回は一日コースです。従って、ランチも彼らと同一行動です。彼らは団体気分楽しくやっています。私はめんどろなのと気後れもあって、黙って食事をしていました。そのうち、彼らの中で一番若いと思われる青年が、私の所にやってきて、「あんたはんの名前は？」と、日本語、いや大阪弁で声を掛けてきました。え～？と一瞬戸惑いました。「ヤマモトです」と返事しました。「英語がでけんのやったら、わてが通訳するさかい、話にはいりまへんか？」ときた。こんな所で、大阪弁を聞こうとは全く予想していなかった。どこで大阪弁を覚えたのかとの問いに対し、彼は大阪の船場 (元の大阪の間屋街) に居たときに覚えたそうです。「そやさかい、日本語ゆうても、大阪弁しかあきまへんのや」という。きっとアドリブで、大阪弁で声を掛けてきたものと思います。多分、私の英語の発音をきいて、私を日本人で、それも大阪出身だと判断したものかも知れませんね。すごい外国人もいたものです。今回もジャングリッシュしか話せない私にとって、楽しい定期市内観光でした。

「旅は道連れ…」、「袖ふり合うも…」を地で行った海外行の一駒でした。

A merry companion is a wagon in the way.